

母語発達と文のねじれとの関連  
— 「……は+述部」の構造を持つ文について —

内田安伊子 瓜生佳代  
(1996.6.29 発表)

### 1. はじめに

文を読みながら何かおかしいと感じた時、文頭に戻って検討するとその原因がわかることがある。このような時、私達は、文の流れがどこかへそれてしまった、文がねじれたなどと感じるが、このような文には、構造や意味の上で何か特徴があるのだろうか。また、このような文を書いてしまうというのは、構文力と関係があるのだろうか。

文のねじれについては、『首尾が整っていない』（野元1979）、『主語と述語の不照応』（都立教育研究所1987）、『呼応の不整』（水谷1994）などの言葉で先行研究の中でも時折触れられているが、上に挙げた疑問に答える形での検討はなされていない。

そこで、本研究では、ねじれ文の構造の特徴を探ること、そして母語発達との関連を見ることを目的として、様々な年齢層の文章を調査することにした。まず、第一のテーマとして、「……は+述部」の構文を持つ文のねじれを取り上げ、分析を試みた。

### 2. 調査方法

お茶の水女子大学附属小学校1年生から6年生、同中学校の1年生から3年生、同高校1、2年生の各学年40名、およびお茶の水女子大学大学生40名の計480名の書いた作文をデータとして使用した。作文のテーマは「手」、長さは、400字以内である。まず、文字表記の誤り以外で訂正した方がよいと思われる箇所を含む文を取り出し、それらの中から、ねじれている文を取り出した。さらに、その中から、「……は+述部」という構造を持つ文を取り出して分析対象とした。

### 3. 「……は+述部」の構造を持つ文に見られるねじれ

#### 3. 1 どのようにねじれているか

A. 不適切な補語が入ったことにより、その後の部分が規定される。

A-1 主部と不適切な補語とに同じ内容の語の重複が見られる。

- ・手は、書くときに、手でえんぴつを持って書くときがあります。

(小2)

A-2 主部と不適切な補語とに同じ内容の語の重複は見られない。

- ・でも今地球上にいるオランウータンなどののりく上動物には、  
ほとんどが、手もっている。(小3)

B. 述語に不足部分あるいは不適切な部分がある。

B-1 主部と述部に同じ内容の語の重複が見られる。

- ・最後にその人が言った言葉は、別に手がなくても人や犬が手伝ってくれるから不便ではないと言った。(小6)

B-2 主部と述部に同じ内容の語の重複は見られない。

- ・ぼくの手のとくちょうは、つめの一番下のぶぶんにとちょっと白い色のところがあります。(小3)

B-3 主部が特定の内容およびそれに伴う形を持つために、述部の内容と形式が制約を受ける。(定義や理由を述べたり、説明をしたりする文)

- ・(なんで人によって形や大きさがちがうのかなど、疑問が出る。)  
それは、多分その人に一番使いやすいような形になっていると思う。

(小6)

C. 「は」を付加されていた語句が途中でできた節の中に含まれてしまう。

- ・しかし、先祖は大変なことにたえきってきたからこそこんな世界ができたのだろう。(小5)

### 3. 2 それぞれのタイプが学年別にどのくらい見られたか

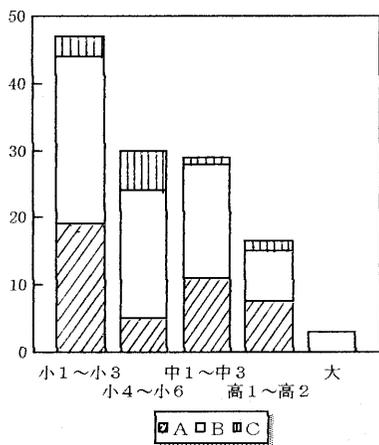
表 1

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	大	計
A-1	6	4	2	1	0	0	1	2	2	0	0	0	18
A-2	1	2	4	3	1	0	3	2	1	4	1	0	22
B-1	2	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	5
B-2	4	6	9	1	1	3	3	3	1	0	1	0	32
B-3	0	0	3	2	4	7	3	4	2	4	0	1	30
C	0	2	1	2	4	0	0	1	0	1	0	0	11
計	13	14	20	9	10	11	10	12	7	9	2	1	118

表 2

		小1～小3	小4～小6	中1～中3	高1～高2	大	計
A	1	12	1	5	0	0	18
	2	7	4	6	5 (7.5)	0	22
	小計	19	5	11	5 (7.5)	0	40
B	1	3	1	1	0	0	5
	2	19	5	7	1 (1.5)	0	32
	3	3	13	9	4 (6)	1(3)	30
小計	25	19	17	5 (7.5)	1(3)	67	
C		3	6	1	1 (1.5)	0	11
計		47	30	29	11(16.5)	1(3)	118

グラフ 1



グラフ 2

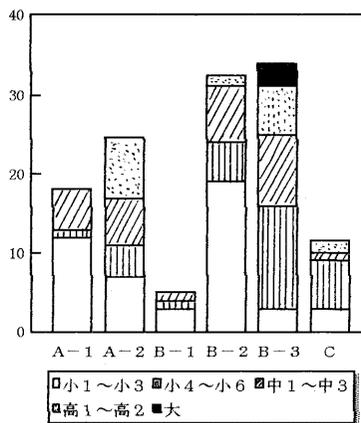


表2は、小中学生を3学年ごとに、高校生を2学年一緒にまとめたものである。3学年分の人数で比較するために、高校生は3/2倍、大学生は3倍した数を（）内に記した。

グラフで見ると、学年が上昇するにつれて、文のねじれが減少するおおよその傾向が見られる。タイプ別では、Bが最も多い。また、主題と述部に同じ内容の語を重複して用いるA-1、B-1のタイプは、小学生、中学生のみにしか見られなかった。

### 3. 3 今後の予定

今回は、ねじれている文のみを取り出したが、今後、「……は+述部」の構造を持つ文を作文の中から全て取り出し、ねじれている文といない文との数を対応させることにより、学年ごとの特色の有無を調べ、母語発達との関連をより詳しく見ていきたいと思っている。また、「……は+述部」以外の構造を持つ文に対しても、ねじれの有無や、そこに見られる意味上、構造上の特色を分析したいと考えている。

#### 【主な参考文献】

- 菊池康人 1995 「「は」構文の概観」『日本語の主題と取り立て』益岡隆志編  
くろしお出版
- 柴谷方良 1978 『日本語分析』第4章「主語と題目」大修館書店
- 寺村秀夫 1991 『日本語のシンタクスと意味 III』第7章「取り立て一係りと結びのムードー」くろしお出版
- 東京都立教育研究所教科研究部国語研究室 1987 『児童の作文能力の発達と学習指導』
- 野元菊雄 1979 「文の筋を通す」『悪文 第三版』岩淵悦太郎編著 日本評論社
- 水谷信子 1994 『実例で学ぶ誤用分析の方法』アルク

(内田安伊子：お茶の水女子大学人文科学研究科日本語文化専攻修了、  
瓜生佳代：お茶の水女子大学人間文化研究科比較文化学専攻1年)